

村の子供は村中で育てた

里草会顧問 福井正樹

村を運営しているのは部落会で、月1回夜に定例の常会があり全戸主が参加し、重要なことを決めると共に、役場などからの伝達もなされた。月当番は順番に回ってきて、公会堂の掃除をして机を並べお茶を準備した。当番の家には電球も廻ってきて、取り付ける。そのままぶら下げておくと、しばしばなくなってしまうからだ。

開始時間を太鼓で知らせたりしていたが、聞こえない離れた家もある。ましてちゃんとした時間に集まることなどなくて、先の人は茶を飲んで雑談していて、なんとなく顔ぶれを見て始まり、終わっても話題によっては一部で話が続いていた。いい加減なようだが、水路や道の修理、茅などの刈初めの日、運営費の負担など、重要なことはちゃんと徹底していた。どんなことでも全員が受け入れるまで、話し合うのである。

婦人会もあったが、集まりなどはめったになくて、校区の婦人会が料理講習や生活改善の学習などをする時、たまにふれが廻ってくる。戦時中の出征者を送る愛国婦人会などの名残だったのだろうか。祖母が料理の講習会に参加して、サツマイモの饅頭のようなものを蒸してくれて、美味かった記憶はあるが、一回作って貰っただけだ。

青年団は最もアクティブだった。村には結婚前の若い男女があふれていた。盆踊りなどのイベントはもちろん、校区や全村や郡の連合活動もある。体育祭や演芸会、映画の上演や村芝居なども主催して、各戸を廻って入場券などを売りつけていた。消防団も構成し、一時自警団のようなこともして、村の道を封鎖して闇のトラックなどを止めていたが、闇屋の上前を撥ねるようなものであった。選挙に村ぐるみでよそ者を入れない張り番もした。表に出るのは男子ばかりで、たびたび夕食後に集まり、当時の知識人である学校の教師が相当深く関与し、熱心に勉強もしていた。

さて私たちの子供会である。中学生になると抜ける決まりで、昔の義務教育であった尋常高等小学校の名残なのだろう。毎週土曜日に集まって神社の掃除と、冬休みや夏休みの夜に拍子木を叩き、火の用心と叫んで村を廻るのが定例会のようなもので、遊びと子供会の活動との区別は明確ではなかった。他の会は会長など役割が決められていたが、子供会は上級生の責任で、会の運営などは慣例である。何をやっても、叱られるのも褒められるのも、上級生である。私たちの学年は5人の同級生がいて、勉強なども一緒にやってみたりした。村の子供会も青年団も、家に子供や青年がいなくても村が認める村の組織だ。熱心なリーダーがいたら活発になる。リーダーシップの発揮は子供会にとどまらず、青年団からさらに村役まで続き、皆が人柄を評価し適切な村の指導者を生み出していた。

田植えが終わって夏休みになる前に、みんなでタニシをとって売りに行ったことがあった。日曜日の朝集まって、手分けして谷筋の田んぼを歩き回り、大きめのタニシを竹の籠に拾い集める。タニシは田んぼの泥の上を這いその跡を残す。化学肥料や除草剤を使用する以前の湿田にはいくらでも見つかる。普段は両手にいっぱい捕って、鶏のために潰して

やるくらいなのだが、この時は大きな鍋に何杯も拾い集めた。

当番の家に集まって茹でてもらい、茹であがったタニシを皆が針で身を突き出す。タニシの蓋は柔らかいので、太めの針で簡単に身を引き出すことができる。タニシの身は結構固く、大きいものと噛み応えのある弾力を備えている。剥いた身をざるに集めて清流で洗い、ふたや柔らかい腸の部分を通して身だけとし、更に塩でもむと締まって、白と黒に光る売り物のタニシができた。

午後はこれを箱に入れて背負い、街に売りに行くのである。タニシ1升は米1升の値段と決まっていた、上級生が峠を越えて売りに行ってくれた。旅館や病院など買ってくれそうな家を廻り、夕方に帰ってきた。この共同作業は覚えているが、この金をどうしたのか、また子供会で金など管理していたのか、あまり記憶がない。

年間の最大の行事は、男の子は「山の神」女の子は「天神さん」という祭りだった。2泊3日の合宿で、山の神は冬休み、天神さんは春休みに行く。当番の家は持ち回りであって、必ずしも子供のいる家とは決まっていなかったが、なんとなくどこかの家が引き受けてくれた。私は山の神しか知らないが、女子の集まりも似たようなものだったのだろう。

準備も運営も子供たちでやる。年で一番の楽しみだった。宿をしてくれる家は、表の二間を提供してくれて、ここで上級生が役割を言い渡す。公会堂から長い座卓を運んでくるもの、村の家を手分けして回ってお供えを集めるものなど、それぞれが動き始める。山の神の1日は一切山仕事を休み、村中誰も山に入ってはいけないことになっていた。

村の各家を回って集めて来たお供えは、米が多かったが、小豆などもあった。山の神には、いま子供がいない家もちゃんと協力した。集まったコメなどは、みんなで食べる以外を宿の人が買い上げてくれる時もあるし、上級生が背負って街に行き、商店など廻って買ってもらうこともあった。その金で鉛筆など文房具の小物を買ってくる。上級生が一部屋に陣取り、順番に年下の子を呼び込み、偉そうに勿体付けて小物をくれる。両手を打ち鳴らして音をだし、みんなには張り飛ばされたと言え、などと先輩風を吹かす。

夕食の後はカルタや双六、将棋などをして遊んでいた。この合宿はとても新鮮な感じがして、みんな大はしゃぎである。昔の若衆宿の名残なのだろうか。翌朝は5時ごろ起きて、宿の人が作ってくれた藁の馬に、握り飯の藁苞を背負わせ、それを挿した2メートル余りの竹を、先導の子が押し立てて山の神の祠まで登る。山田が終わった先に牛の放牧の柵があり、広い萱場がありさらにのぼると山道が左右に分かれる。そこに巨大な岩があり、その下の洞に山の神が祀られている。「ヤマノカミノカンジー」と声を合わせて叫びながら登るのだが、登るほど雪が深くなり、上級生が無理と判断したところでお供えを置く。そして[アトミナーシラサギ]と唱えながら戻ってくる。結構大変な行事だが、これも成人儀礼だったのだろうか。戻るとまた宿で大いにみんなで遊んだ。一種の解放感と仲間意識が生まれ楽しかった。私たちが上級生になるころ、後に続く男の子が無くなってしまった。女の子はいたが、男性が戦争に出ていたこともあって子供が少ない。下級生がいないと、山の神講は成り立たないので、私たちが低学年の時でこの行事は途切れてしまった。